

みえ現場 de 県議会

「鳥獣害に強い地域づくり」実施概要

1 日時・場所 平成28年2月5日(金)14時00分～16時00分
松阪市嬉野ふるさと会館 多目的ホール

2 テーマ 「鳥獣害に強い地域づくり」

<テーマの選定理由>

野生鳥獣による被害は、経済的被害や森林生態系への被害のみならず、営農・林業経営意欲の減退や耕作放棄地の増加等をもたらす一因ともなっており、このことは、とりわけ被害の多い中山間地域の地域活力の減退、地域そのものの衰退に直結する懸案事項であり、暮らしと産業を守るための効果的な対策が求められるところです。

鳥獣害による被害の減少に向けては、集落ぐるみによる野生鳥獣を侵入させないための対策、野生鳥獣の捕獲や森林整備による生息管理、捕獲した野生鳥獣の肉(ジビエ)の利活用などをさらに促進する必要があります。また、こうした取組を地域の課題として捉え、関係者が連携し、地域ぐるみで取り組む必要があります。

そこで、三重県議会では、鳥獣害対策等に関わっている様々な方や県民の方から直接意見を聴くことで、鳥獣害対策の現状や課題を把握し、今後の議会での議論に反映していきます。

3 参加者等

- ・鳥獣害対策等に関わる方 6人
- ・一般公募の方 4人
- ・県議会議員 14人 印は広聴広報会議委員

中村進一議長、中森博文副議長(広聴広報会議座長)、森野真治議員(座長職務代理者)、藤根正典議員(総務地域連携常任委員長)、田中智也議員(戦略企画雇用経済常任委員長)、東豊議員(環境生活農林水産常任委員長)、長田隆尚議員、大久保孝栄議員、石田成生議員、野口正議員、田中祐治議員、濱井初男議員、山内道明議員、中瀬古初美議員

- ・傍聴議員 7人
- ・傍聴者 30人

4 プログラム

- (1)開会 挨拶(中村進一議長)
- (2)趣旨説明
- (3)自己紹介
- (4)意見交換
- (5)閉会 挨拶(中森博文副議長)

5 主な意見等

【被害の現状と課題】

昭和50年代の前半頃から山林で植栽するヒノキの苗木がニホンジカに食べられる被害が出て、主に里から離れた山奥での被害が多かったが、昭和60年代前半には段々と里の方に近づき、現在では集落の中まで出没している状況であり、里山の植林が非常に深刻な被害を受けている。

里山付近の山の下層植生をシカが食べつくし、雨が降ると土壌流出が起こるなど森林機能が損なわれている。

鳥獣保護法が、昭和46年にできた環境庁に所管が農水省から移った。環境はシカを保護してきたため、特に雌シカの捕獲は5年ほど前に解禁になったばかりであることから、シカの頭数は今の状況にあると思う。

10年前には獣害被害はほとんどなかったが、ここ数年増加し、一昨年あたりから極めて深刻な状況にある。

中南勢全体でイノシシ狩りなどを行ってきた中で感じるのは、大雑把な表現だが、山が健全でないということ。谷間にある水田には水がなく、山の地面も葉っぱが定着していない。健全な山を作ってほしい。健全な山を作ってもらえると水ができて、そのきれいな水がいろんな魚とか育て、それが流れてきれいな海に流れて豊富な漁場の海になる、そういうサイクルを取り戻さないといけないと考えている。

20年ほど前に初めてシカが美杉に出現し、それからは植林しても全部引き抜かれ、芽はかじられ、古木の皮もどんどん剥がされるようになった。

行政に相談して網を張ってみたが、シカは網を突き破ったり、飛び越えたりしており、山の中を毎日管理することもできず、大変な状態になっている。

シカの皮剥ぎは、杉もヒノキもあるが、主にヒノキが多く、奥山の方は被害の出ない日はないと思っている。

米や野菜なども最近被害に遭っているが、そういうものは翌年に対策をとってしのぐことができると思うが、100年、200年になった木が被害に遭うと、遡って植え直すこともできない。100年以上もの間、何世代にわたり手入れして貯金してきた木が、20年ほど前からシカにやられてしまい、1000万円くらいするであろう木でも10万円くらいまで値段が暴落している。

昭和48年に動物愛護保護法が制定され、飼い犬を鎖につなぐと同時に野犬をすべて殺処分してしまい、シカを追いかける天敵がいなくなり、シカは安心して子どもを産むようになったことが、このひどい状況の原因と考えている。

ニホンカモシカの被害については、具体的な情報がない。

【鳥獣害対策の現状と課題】

猟友会の会員は、銃猟が減ってきており、わな猟が増えてきている。

シカ、イノシシの捕獲数は、年々増えてきている。

狩猟するのに狩猟税を払っており、狩猟行政のために使うのが本来だと理解している。

私は、地域の子どもたちに野外観察や自然観察などの環境学習を行っており、フィールドでのけもの道や足跡の発見などの具体的な体験を通じて、次代を担う子どもたちに動物と共生する資質を培いたいと思っている。

平成18年ごろからサルやイノシシの獣害が出てきて、県の助言もあり、サルに関しては追い払い隊をつくり、平成19年から追い払いをやったところ、効果は抜群であった。ただ、少し油断するとダメで、継続して追い払いを行っている。

シカやイノシシに関しては、金網を張ることで一時的には効果があったが、慣れてくると、穴を掘って侵入してくる。また、地元の長老などに聞くと、網を張ったことで、里と山に壁ができ、山の仕事に行きにくくなり、林業をやめ、山が荒れてきたとも言っている。

獣害対策については、個体数を減らすのが一番だと思うが、非常に難しい話であり、サルの追い払いもいつまでやればいいのかと、先の見えない状況である。

価値観の調整ができていないと感じている。動物愛護団体と自分たちの獣害対策は真っ向から対立しており、これまで一緒に議論することがなかったけど、整理していかなければならないと考えている。個人的には3年後ぐらいには、動物愛護団体の方にも獣害対策の中に入れてもらって一緒にやっていきたいと考えている。

猟師として活動しているが、この10年で後輩の猟師が5人もいない現状である。解体処理施設を営んでおり、みえジビエに登録して、現在は、関東方面から県内の飲食店等、50店舗ほど卸している。飲食店ではロース等シカ肉の一部しか調理していないので、なるべく無駄をなくするためにシカ肉全体を料理することをお願いしている。

これからの取組としては、食品加工業者と品質管理をうまく適合して、食肉解体処理方法のスピードを上げないといけないと思うし、みえジビエの品質、衛生管理、これが日本一厳しい管理下になっているので、その手順の確認や技術の意見交換等をしっかりとやっていきたい。

地域の課題を解消するために、県や市の協力をえて、獣害対策を最重要課題として取り組んだ。獣害対策としては、集落全体を餌場にしないため、段差を完全に取り払い、サルの餌場として魅力のない集落にし、追い払いを徹底的にした。

農業研究所からデータ分析など情報を提供してもらい、それを地域の方へ発信し共有することで、地域の獣害への意識を保っていると考えている。

まる三重ホカクンを設置したことで、シカをかなり捕獲している。集落を取り囲む防止柵もしており、集落内の被害は減っている。

ソフト面とハード面の両方をからませた獣害対策によって、被害軽減の効果が出ていると思っている。

今後も県や市から獣害対策の資料やデータ、新しい技術など継続して支援してもらい、被害軽減に向けて地域として自分たちでやっていくことを望んでいる。

山については、シカによる樹皮の皮剥ぎによって倒木が出ている状況であり、山中にいるシカについては、猟友会さんがいろんな方法で捕獲する必要があると考えている。

ニホンジカはエゾシカに比べて、個体が小さく、食用にできるのは1頭あたり4分の1ほどである。皮はなめし、骨はドックフードというふうに、いろいろ分けている。

鳥獣駆除費については、松阪市ではシカ1頭あたり1万円でサルは1万5千円だが、採算が合う金額ではないと思っている。

飯南で銃を持って駆除にあたる人は最大8人で、そのうちサルを撃てるのは4人し

かおらず、その4人のことを車の車種までサルの群れは認識しており、車で走っている間にサルはいなくなってしまう。

サルについては、猟友会の会員が鉄砲をもっていくと、一目散に山へ隠れてしまうので、サルの捕獲は至難の業であり、捕獲檻の方がベストだと思う。

平成21年に銃刀法が改正され、銃の保持等が厳しくなり、多くの方が銃を持つことをやめてしまった。改正前の状態には戻っていないが、柔軟な対応になったこともあり、銃刀法の試験の合格率が30%前後から70~80%まで上がった。申請から許可までの期間がかなり迅速になった。猟友会の会員数を増やすことは、好きでないことはできないことから難しいと思っている。

イノシシについては、7月、8月、9月にウリ坊が箱罟にかなりかかるので、減ってきたのではないかと思うが、シカについては、箱檻にもなかなかかからないので、銃で射殺するしかないと思っている。

三重大大学の学生が地域で活動してくれていて、去年、一昨年と2人がわなの免許を取得し、捕獲にあたってきている。今年も1人取得予定である。また、大学に獣害対策のサークルを作ることを提案をしている。

捕獲に力を入れていくにしても猟をする若い人がいない。人材育成というのは、誰かがつくるのではなく、その場所がつくるので、その場所づくりというのは、結局は山間地とかへき地でもそこに住むメリットがあると思えるようなことだと思う。自分は生業として肉を扱っており、5年、10年先にも仕事として続けていければ、それがモデルケースにもなると思うので、頑張っていきたい。

【提 案】

地域ぐるみの捕獲がコアになる対策だと思っており、行政の支援をお願いしたい。さらなる人材養成や確保を行い、獣害対策のマンパワーの充実施策を拡充していただきたい。

地域ぐるみでの獣害捕獲には、科学的な知見に基づく広域的な捕獲計画や捕獲体制の充実が必要であり、有害鳥獣の正確な推定生息数をデータ集積し、分布の状況調査を行い、捕獲頭数を確定することで、効果的な捕獲手段の設定が可能となる。地域では鉄砲やわなは無理であり、適切な捕獲檻を設置するしかないと思う。

猟友会だけでなく、機能的に広域に活動できる若いハンターの組織化が必要であると思う。

山からのお恵みということをふまえたジビエ料理を開発するなど、消費者や市民へアピールできる体制、そういった人の連携が大事になってくると思う。

地域の主体性が大事であり、意識の問題だと思っている。議員の方には、安易に陳情などを受けるのではなく、「行政がここまでやっており、こういう点に問題があるから、地元が頑張れよ」といったふうに言ってもらいたくのが大事だと感じている。みえ県民カビジョン第二次行動計画にある目標で、野生鳥獣による農林水産業被害金額があげられているが、シカによる天然林の被害が含まれていないと思うので、人工林だけでなく天然林も含めた目標を掲げていただきたいと思う。

被害状況を把握して、最終的にどういった森にするのかを決め、適正な生息数を算出し、どういったことを行い、どれだけ捕獲するのかをといった流れを作るといいと思う。

県による捕獲の事業をモデル事業として実施していくとあるが、県による捕獲というのが、どういう位置付けにするのか、何を積極的に実施するのかということが非常に重要だと思っている。

熊野の方から研修生が来て、一生懸命勉強しているので、熊野の方にも解体処理施設を作っていただきたい。

シカは短距離選手で、長距離選手の犬に追いかけられるとへばることからも、本当に賢い教育された犬にGPS等を付けて放し飼いにして、安全に里を守ってくれる里守り犬のような存在の犬を育てた方がいいと思う。

獣害対策をやることによって、森が守られることから、みえ森と緑の県民税を獣害対策に使えるようにお願いしたい。

獣害対策にかかる費用が非常に負担になっており、皆伐後の植栽が進められにくいことから、林業というものを長期的なサイクルで考えて、循環的な機能が十分発揮できるように、今後協議をしていただきたい。

ジビエ料理を学校給食で提供していただき、学校に猟師さん等が行き、獣害対策の説明をするなど、子どもたちの環境学習に生かしていくことも大事だと思う。

みえジビエに対するマニュアルが非常に厳しい。くくりわなで捕獲したものしか処理できないシステムになっているが、銃で首から上を撃った場合もいように対象の拡大を検討してもらいたい。

県が捕獲を始めたが、今まで地域でやっていた有害捕獲と同じではいけないと思う。例えば、有害捕獲が届いていない捕獲が困難な地域や車でのアクセスが困難な地域だったり、この地域が本当に危ないと思うところに優先順位を付けて、ピックアップしていく方がいいと思う。

6 会場アンケートで寄せられた主な意見、感想など（参加者、傍聴者）

【会議の感想】

鳥獣害に関して、様々な立場の方が一堂に集まって現状をお話し頂いたので、多面的な議論ができたのではないかと。

参加者の方に話してもらった形式を統一してもよかったと思います。全体的に話が具体的でわかりやすい人が多かったので、おもしろかったです。

現場の認識、言葉で理解しているのと肌身で感じることはすごく差がある。カモシカも異常に繁殖しているし、駆除の必要があると思う。

議会でもワーキンググループを構成し、細部の研究に取り組みれたらよいと思います。

近年の激減する林業予算を適正な森林の維持増進につながるよう増額していただきたい。三重県の木材生産量は全国的な調査結果から下位に近く、皆伐の促進や森林の更新（雑木の植栽を含む）を真剣に考えて頂きたい。

現場の声が聞けて良かった。知らない事も多かった。

避妊薬を散布して子供を増やさない手立てを！（保護団体との関係）

焼却施設（県内数カ所）の検討が必要。

いろいろな立場の方々の意見が聞くことができた。動物愛護の方も含まれても良かったのでは。

捕獲に対して国の補助金は、成獣は8,000円だが、幼獣は1,000円であまり

にも差がある。捕獲の手間は同じ。幼獣のうちに捕獲すれば、子供を産み増えることがない。

業としてやるには出口をしっかりとしないといけないという意見にはすごく共感。みえジビエを広めたいのなら、獣害の多い地域に解体・加工場を作り、雇用を生む必要がある。地域へ人が流れてくる。若い猟師の育成も可能になるのでは。

各団体や現場の方々の意見や提起が聞けて有意義だった。公募も含めた参加者の方々にシンポジウムやパネルディスカッションをしてもらった方が、より議論が深まった気がします。

中山間地域のかかえる重要課題のテーマは良かった。農産物や森林のみならず、住民の生活にも大きく支障をきたしているので、とる・食べる・追い払う施策の充実を期待します。

中山間地域の後継者対策について。子供が少ない時代からいない時代になってきている。このままでは地域自治体の維持ができなくなり、森林だけでなく、農地の荒廃が進み、大変なことになる。

【みえ現場 de 県議会の在り方】

もう少し小規模に詳しい話し合いとしないと形式的なものに終わってしまう。

個々のコメント等、事前に資料等でまとめて頂いていけばよりスムーズにできたと思った。

多様な参加者がいるのは興味深いけど1人1人の話が浅くなっていた気がする。もったいない。あくまで、議員と専門家を交わらせたいのであれば、小グループのグループワークにして、各グループでの建設的な議論をする方が良かったのではないだろうか。